日本人とアメリカ人大学生における特性と状況の自発的推論

○清水由紀

(埼玉大学)

キーワード: 対人認知, 文化比較, 自動的過程

Spontaneous trait and situation inferences among Japanese and American undergraduates

Yuki SHIMIZU

(¹Saitama University)

Key Words: person perception, cultural comparison, automatic process

目 的

人は他者の行動を見たときに、意図や指示がなくても自発的に他者のパーソナリティ特性を推論する傾向がある(Uleman, Saribay, & Gonzalez, 2008)。このような自発的特性推論(Spontaneous Trait Inference; STI)に文化差が見られるかどうかについて、これまで米国内の中の人種間の比較が中心に行われてきた(e.g., Na & Kitayama, 2011)。しかし文化間の直接比較は行われていない。

一方で、特性と状況のいずれも暗示するような行動記述から、STIだけではなく自発的状況推論(Spontaneous Situation Inference; SSI)も弱い程度であるが生じることが示唆されている(Ham&Vonk, 2003)。社会的行動の原因として欧米の人々は特性などの個人的側面を強調しやすいのに対し、東アジアの人々は状況の側面を強調しやすい(Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001)ことが示唆されていることから、STIとSSIの同時生起において文化差が見られると考えられる。そこで本研究では、日本人とアメリカ人を対象として同一刺激を用いた比較を行うことにより、STIおよびSSIの生起の文化差を直接的に検討する。

方 法

要因計画 文化(2;日本・アメリカ)×試行タイプ(2;再学習試行・統制試行)×再生語(2;特性・状況)の3要因計画。文化のみ対象者間要因。

実験対象者 日本人大学生48名(Mage=20.1), アメリカ人大学生54名(Mage=19.7)。

手続き ①接触フェイズ:行動記述文および行為者の顔と行動が行われた状況を表す写真のペアを42ペア呈示した。20ペアは特性と状況のいずれも暗示する文, 20ペアは特性を暗示しない中立的文であった。最初と最後の1ペアずつはフィラーであり、中立的文であった。②遅延フェイズ1:文章の印象評定およびアナグラム課題を行ってもらった。③学習フェイズ:接触フェイズと同じ「顔&状況写真」と特性語もしくは状況語のペアを呈示した。接触フェイズにおいて、同じ写真に対し、再学習試行では特性・状況暗示文がペアになっており、統制試行では中立的文がペアになっていた。つまり、接触フェイズにおいて文を読んだ時点でSTIもしくはSSIが生じていれば、学習フェイズでは再学習となるため記憶しやすいと考えられる。なお再学習・統制試行はそれぞれ20試行であり、いずれも特性語がペアになったものと状況語がペアになったものが半数ずつであった。④遅延フェイズ2:アナグラム課題を行ってもらった。⑤再生フェイズ:顔写真のみを呈示し、学習フェイズでペアになっていた特性語もしくは状況語を思い出して回答するように求めた。

結 果

再生フェイズにおいて正しく再生された特性語もしくは状況語の数(Max=10)は、Figure 1 のようになった。これを従属変数とし、文化(2)×試行タイプ(2)×再生語(2)の分散分析を行った結果、文化($F(1,100)=24.17, p<.001$), 試行タイプ($F(1,100)=30.45, p<.001$)の主効果, および試行タイプ×再生語($F(1,100)=23.48, p<.001$), 文化×試行タイプ×再生語($F(1,100)$

$=5.24, p<.05$)の交互作用が有意であった。下位検定の結果、特性語再生においては、試行タイプの単純主効果は日米ともに特性語再生のみにおいて有意だったが、再学習試行と統制試行の得点差は、アメリカ人の方が日本人よりも有意に大きかった($t(100)=2.34, p<.05$)。状況語再生においては、日本人においてのみ試行間の差が有意傾向であった($t(47)=1.69, p<.10$)。

Figure 1 Mean numbers of correctly recalled traits or situations

考 察

日米のいずれにおいても、STIが生起したことが示唆されたが、その大きさには文化差が見られた。日本人においてSTIの生起が小さいという結果は、先行研究(Shimizu, 2012)と一致している。一方で、SSIはアメリカ人では全く生起せず、日本人ではわずかに生起することが示唆された。

以上より、特性も状況も暗示する行動に接した際、アメリカ人は特性のみに焦点化した符号化を行うのに対し、日本人は特性の方が優勢ではありつつも状況情報をも含んだ形で符号化する可能性が示された。今後は、より多くの参加者を対象とし、誤再認パラダイムなどの他の記憶課題も用いた検討が必要である。

引用文献

- Ham, J., & Vonk, R. (2003). Smart and easy: Co-occurring activation of spontaneous trait inferences and spontaneous situational inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, *39*, 434-447.
- Na, J., & Kitayama, S. (2011). Spontaneous Trait Inference Is Culture-Specific. *Psychological Science*, *22*, 1025-1032.
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review*, *108*, 291-310.
- Shimizu, Y. (2012). Spontaneous trait inferences among Japanese children and adults: a developmental approach. *Asian Journal of Social Psychology*, *15*, 112-121.
- Uleman, J. S., Saribay, S. A., & Gonzalez, C. M. (2008). Spontaneous inferences, implicit impressions, and implicit theories. *Annual Review of Psychology*, *59*, 329-360.

※実験実施において、ニューヨーク大学の Dr. Uleman 氏と Lee 氏の協力を得た。